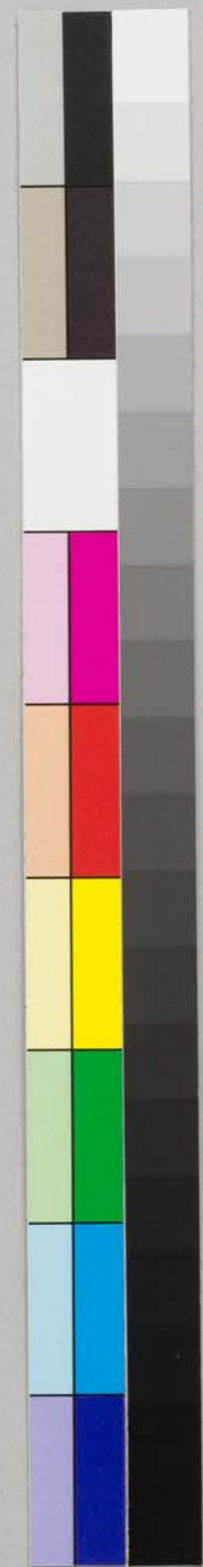




遺
43

高野
長英
尺牘





高聖長英先生真蹟

花香隆一印宛
天蹟并借自滄文



昭和庚午

為孫長運謹書





篆書
卷之二



昔者夫子始於此也
 而後世之君子
 莫不以此為法
 而行之也
 然則夫子之教
 豈易言哉
 夫夫子之教
 所以化民成俗
 而為天下之歸
 也
 故君子欲學
 於夫子者
 必先求其心
 而後求其言
 此所以為學
 之要也
 且夫子之教
 所以為天下
 之歸也
 故君子欲學
 於夫子者
 必先求其心
 而後求其言
 此所以為學
 之要也

夫子之教
 所以為天下
 之歸也

卷



口上

長く滞留御世話（マカシ）罷成御礼

難申尽候、然、御帰リ、待可申

候、天氣も相成候中、一先御

咄申候、是能越度又彼方も

登足以前、便りも致遣度、

今日罷出申候、御留守中御礼

不申、先礼も相當り又不得

拜顔、於、老生も残念、御

座候得共、何介右之譯中、不悪

御會、可被下候、兼、願、上置候後

何分も御親申上候、尤、此跡より

人指出候ことも可仕も又其内老

生罷出候事も可有候、其節御

工夫可被下置、洋文解、指

上置度候、途中外、為見申

度、所有之候中、持参致し候、

此又跡、はやく可指上候、御家内

様中、宜敷御礼御傳、可被下候

何事も跡より可申上、又、用事

書認置申候、以上

花香詞兄

内用

環老人

（オボエ）
見

一八五五兩也

右ハマーリン上下二冊令

ホングラントと云、夕夕チキキ写

本全部御預申候約束

にて借用致候、書物、跡

より近日可指上候、為、後日

仍、如件

環（美印）

嘉永三年三月

隆一郎様

こは長英先生が晩年の門人の千葉早香取郡葛城村の篤道人（あて名に詞兄とある）花香隆一郎名恭法に於てたもの、先生は天保十年（一八三九）入獄後六年目、弘化元年六月、獄舎火災の爲め放たれ歸るべき様諭されておたのを歸らざる（脱獄の罪に相当）して各地を潜行し、郷里水沢に歸りて老母を省し、その後は、はやく江戸市中、それから四國の宇和島更に九州に渡り、麻兒島を潜行を続け、その間、密かに藩主以下の庇護を受け、門人を致え、著述、翻訳、往來し、次で名古屋から嘉永二年（一八七九）八月、面貌と変じて江戸に入り、翌年即ち同三年、初め頃、この状に出る、千草葛城村に來て花香方にかゝり、三月に江戸に入り、次、三伯の改名で門人宮城の世話で青山百人町（今の南青山六丁目）に医を用業したの、ところが、貴金目あての幕府警部の手先役人に見破られ、十月晦日の夜、非業の最後となつた

この状は先生の現在伝はる最後の筆蹟だらうと思はれる、借金記中の夕夕チキキは兵法書、三兵（共騎、碗）夕夕チキで原書は独逸書、それの蘭訳書を先生が翻訳した即ち邦訳書である

花香恭法は明治三十一年死し、この状はその孫、花香伝右工門から研医会の有に歸したもので、先生の裔孫高野長運氏はこの状を、長英伝（昭和十五山岩波發行）の六二二頁及び長英全集才四巻、卷末に写真版として引用説明してある

昭和四十二年十二月十日（土）夜、青山善光寺の先生碑、除幕の前夜、お念書致志（一）す



分割撮影記録票

コレクションコード: _____

文献コード: KNIK - 000239

文献内画像連番: 00012 00013 00014

		2	1
		///	3 ///

記入方法: 分割したコマ数を実線で囲い、その枠内に撮影した順番を記入する。

口上

長く滞留御世話(マカシ)罷成り御礼

難申尽候、然、御帰リ待可申

候処、天氣ニも相成リ候中、一先ツ御

咄(ナシ)申候処ニも、能越ル度又彼方へも

癸足以前ニ便リも致遣度旁

今日ハ罷出テ申候、御留守中御礼も

不申、失礼も相当リ又不得ニ

拜顔ハ於テ老生も残念ニ御

座候得共、何介右之譯ハ不悪

御會ニ可被下候、兼願上置候儀

何分も御頼申上候、尤此跡より

人指出し候ことも可仕もし又其内老

生罷出候事も可有候、其節御

工夫ヲ可被下置ハ洋文解ハ指

上至直度候処、途中外ニ爲見申

度所有之候ハ持参致し候、

此又跡ニ於テ可指上候御家内

様中ハ宜敷御礼御傳、可被下候、

何事も跡より可申上又用事ヲ

書認置申候、以上

花香詞兄

内用

環老人

これは長英先生が晩年の篤志子入(あて名に訂法にあってたもの、先生目、弘化元年六月、獄様諭されておられたり、各地を潜行し、郷里しは、りく江戸市中、に渡り、麻兒島まで藩主以下の庇護を、訊く、往事し、次、江、頃、この状に出る、く、まわれ、三月に江戸城の世話で、青山百人、業したのである、この手先、後人に見破らとなつた

この状は先生の現在

は、借金、中、の

碗、タク千千で、原書は

が、説、した、即ち、邦

花香茶法は、明治三十一

工門から、研、医、会、の有

長運、民、は、この、状、を、長

三頁及び、長英全集、

引用、説明、して、ある、

昭和十一年十二月十日

人指出し候ことも可仕もし又其内老
生罷出候事も可有候其節御
工夫可被下置洋文解指
上置度候処途中外爲見申
度所有之候中持参致し候
此又跡^シにゆり可指上候御家内
様中^{ヨロシク}宜敷御礼御傳可被下候
何事も跡より可申上又用事
書認置申候以上

花香詞兄

内用

環老人

(オボエ) 見

一金五両也

右ハマーリン上下二冊今

ホングラントと云^ラ夕夕チキキ写

本全部御預^ク申候約束

にて借用致^シ候書物跡

より近日可指上候爲後日

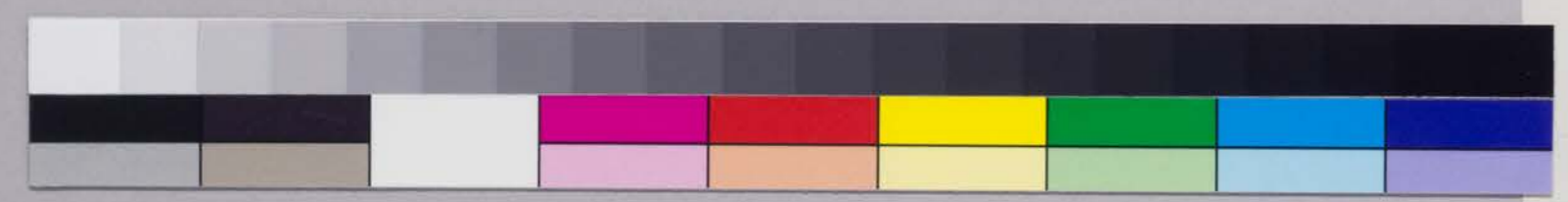
仍^テ如^レ件

環 (墨印)

嘉永三年三月

隆一郎様

目此化元年六月獄
様諭されておたの
各地を潜行し郷里
しはらく江戸市中
に渡り麻兒島まで
藩主以下の庇護
訊^ルに往事し次いで
月面貌を變じて江
頃この状に出る
くまわれ三月に江戸
城の世話で青山百人
業したのであると
の手先役人に見破ら
となつた
この状は先生の現在
はゆる借金^シ中^ノの
碗^ノ夕夕チキキで原書は
が翻訳した即ち邦
花香茶法は明治三十一
工門から研医会の有
長運氏はこの状を長
三頁及び長英全集
引用説明してある
昭和十一年十二月十日
陰幕の前夜、羽書



御一先

及又彼方へも

道度旁へ

留守中御礼も

不得

然念、御

譯、不悪

願上置候儀

候尤此跡より

仕もし又其内老

有候、其節御

文解、指

外、為見申

持参致し候、

可指上候御家内

花御傳、可被下候

申上、刃、用事

以上

環老人

下二冊今

夕クキキ写

申候約束

候、書物、跡

これは長英先生が晩年の門人の千葉景香取郡萬歳村の篤子入（あて名に詞兄としてある）花香隆一郎名恭法にあてたもの、先生は天保十年（一八三九）入獄後、六年目、弘化元年六月、獄舎火災の爲め放たれ歸るべき、様諭されておられたのを歸らざる（脱獄の罪に相当）して各地を潜行し、郷里水沢に歸りて老母を省し、その後しばらく江戸市中、それから四國の宇和島更に九州に渡り、麻兒島まで潜行を続け、その間、密かに藩主以下の庇護を受け、門人を啟え、著述、翻訳、往事、次いで名古屋から嘉永二年（一八七九）八月、面貌を変じて江戸に入り、翌年即ち同三年初旬頃、この状に出ておる千葉萬歳村に來て花香方にかゝり、三月に江戸に入り、沢三伯の変名で門人宮城の世話で青山百人町（今の南青山大丁目）に医を開設したところがある、ところが、當資金目あての幕府警署からの手先役人に見破られ、十月晦日の夜、非業の最後となつた

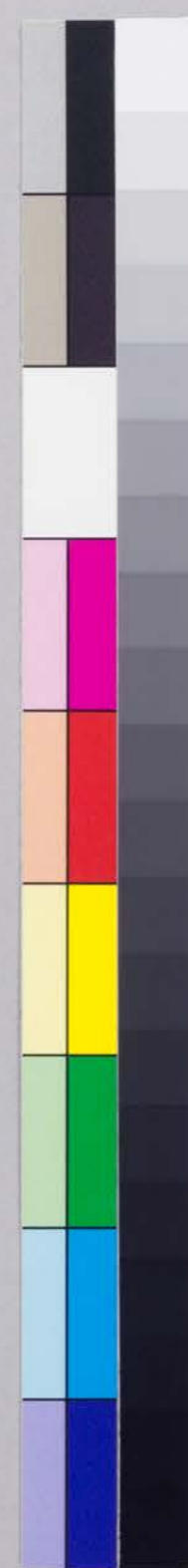
この状は先生の現在伝はる最後の筆蹟だらうと思はれる、借金部中の夕クキキは兵法書、三兵（歩、騎、砲）夕クキキで原書は独逸書、それの蘭訳書を先生が翻訳した即ち邦訳書である

花香恭法は明治三十一年死し、この状はその孫、花香伝右エ門から研医会の有に歸したもので、先生の裔孫高野長運氏はこの状を、長英伝（昭和十五、山波發行）の六一三頁及び長英全集才四巻卷末に写真版として引用説明してある

昭和四十二年十二月十日（土）夜、青山善光寺の先生碑除幕の前夜、川倉敬高（一三）



東京市赤坂區青山北町一ノ一
本山豊実様
親展



職

昭和四年十月二八日

岩手縣水澤町

高野醫院

電話 二二九番

高野長吉



No. 2 院醫野高堂阜瑞

昭和四年十月二十八日午後

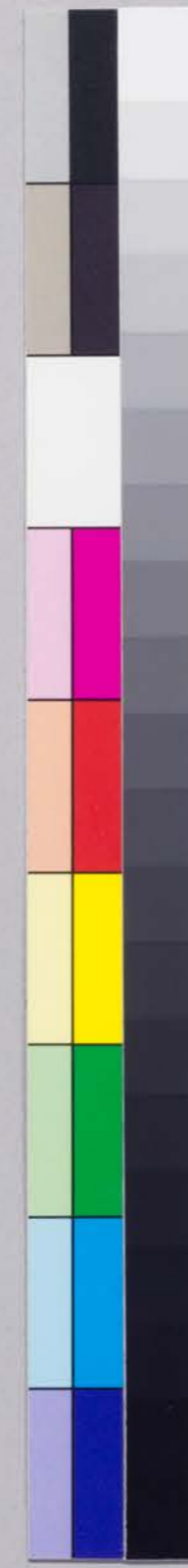
高野長 運用箋
電話 三六三三
三六三三

此通書を以て此の如く申すは又根本若くは日令何れ
に任ずるやせしむるは甚だ事多し申すに任ずるは申す
節申すは任ずるは申すは申すは申すは申すは申すは申す
貴の御書に申すは申すは申すは申すは申すは申すは申す
本山豊実様
二件迄申すは申すは申すは申すは申すは申すは申す
期も一ヶ月は申すは申すは申すは申すは申すは申すは申す

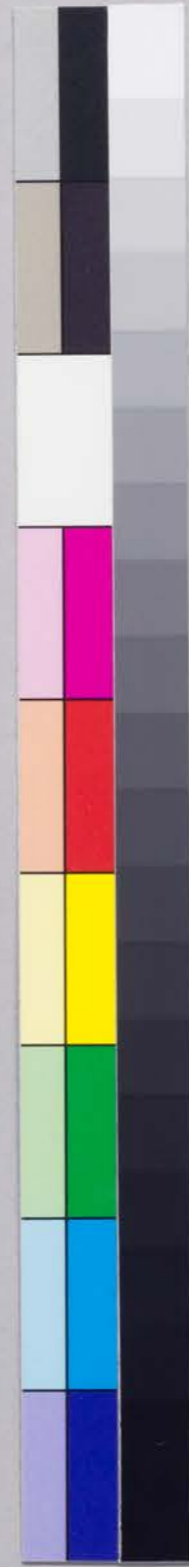
高野長(印)



東京市麻布区本町一丁目
鈴木睡園先生



封
元正元年
四月七日
新本兩漢



雨後未及口疎者以交
卷上清輝 亦能降之
此正幸 願能下他幸

以福心 亦之 叔也 可息

雖未敢 亦望長矣

尺陰 亦之 亦之 亦之

相之 亦之 亦之 亦之

海之 亦之 亦之 亦之

亦之 亦之 亦之 亦之

却 亦之 亦之 亦之

國 亦之 亦之 亦之

亦之 亦之 亦之 亦之

亦之 亦之 亦之 亦之

亦之 亦之 亦之 亦之

亦之 亦之 亦之 亦之

亦之 亦之 亦之 亦之

亦之 亦之 亦之 亦之

亦之 亦之 亦之 亦之

亦之 亦之 亦之 亦之

亦之 亦之 亦之 亦之

亦之 亦之 亦之 亦之

而

睡園先生
筆

亦之 亦之 亦之 亦之



雨後未來口跡為以交
卷之小語祥 古如降
之 幸 欲 繼 下 他 幸
以 祥 心 之 之 叔 之 之 是
禮 之 之 之 之 之 之 之 之
尺 際 之 之 之 之 之 之 之
相 之 之 之 之 之 之 之 之
海 之 之 之 之 之 之 之 之
之 之 之 之 之 之 之 之
即 之 之 之 之 之 之 之 之
周 之 之 之 之 之 之 之 之
寺 之 之 之 之 之 之 之 之
即 之 之 之 之 之 之 之 之
以 之 之 之 之 之 之 之 之
道 之 之 之 之 之 之 之 之
之 之 之 之 之 之 之 之
之 之 之 之 之 之 之 之



却以与方自二百五十

圓法之口故与与是下

寺部与一与与子希

即与与一与与与与

以子与与与与与与

是是是是是是是是

子部一南自之与与

是是是是是是是是

情口与与与与与与

之是口部与与与与

与与与与与与与与

与与与与与与与与

面所

眼固光生

字

的得能也之与与与

与与与



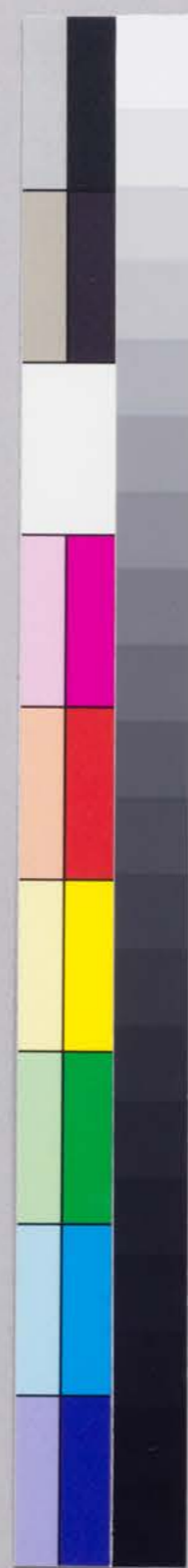
千葉縣香取郡萬歲村
花香傳右衛門殿



封

明治三十五年二月十一日午前

東京市赤坂區靈南坂町三十四番地
志賀重昂



謹終過般池地方罷出
節は種々濃厚情に身籠
有御禮申上は嘉登様との
夜酌使漢勢力の逸事鐵
牛陣師の事業等の話今更
面白く追懐の念に堪へず殊
に高野長英の御厚大令宛
へたる手紙及び用紙等は如何にも
珍しく長英の晩獄後江戸
名古屋宇和島に潜伏する事
は誰にも承知に有之其の最後より
二年前書方問はせ下侍の居る
一書滿大令下宛とならぬ最
後下出せしものと無之（お水二年
十月朔日青山下流に於て自ら喉
を穿て斃れられたる方之其は下侍
稀也の遺物と存先は御禮の方
所感のみ是れ勿く採具
音音 志願書島

七香坊右衛門殿

尚徳公甥の親下付御禮の件は御
休暇の折下り御礼承命に



謹啓過般沙地方へ罷出
節は程々沙厚情に身難
有沙禮申上は嘉登様上
夜酌侯漢勢力の逸事鐵
牛陣師の事業等の沙話今更
面白く進徳の念に堪へは殊
に高野長英の沙傳大介宛
てたる手紙及借用沙書は如何も
珍しく長英の脱獄後江戸
名古屋宇和島に潜伏し其等
は誰人も承知に有之其の最後より
二年前高野河津世に傳へ居る
（其沙傳大介宛に宛てたる如き最
後沙書ものとして無之）亦此二年
十月朔日青山に沙書の通す自ら喉
を穿て斃れたるものも有之其は沙傳
稀也の沙物と存先は沙禮等
所感のみ申上は勿く採具



不圖下流... 進三...
牛禪師の事業等の法流...
面白く進徳の念...
に高野長英の法...
たたり子...
珍しく長英の...
名古屋...
は誰人も...
二年前...
（共...
後...
十月朔日...
を...
稀也の...
所感...
音十日

志願書

七香坊右衛門殿

当...
休暇...



衣香茶法に及ぶ書翰
及
花香象に造せし借用證文
左書翰一通中文は
宮野長英全集
(宮野長英著)
昭和十八年岩波刊
白六二四頁
至六二四頁
掲載

